

日本における都市の観察方法に関する研究

A study on methods of observing cities in Japan

○加藤史晏¹, 大川碧望², 佐藤慎也²*Jian Kato¹, Aono Okawa², Shinya Satoh²

The urban environment in which social life takes place is undergoing constant material change at the hands of people. In many cases, this change is measured based on various capitalistic background measures, such as urban development and the income brackets of the inhabitants. However, it is accompanied by social change, and there is a lack of evidence for the speed of change in each of the contemporary social scales. This study aims to systematize urban observation in Japan and investigate suitable methods to enable urban observation with speed that observes the surface of the urban environment.

1. 研究背景と目的

社会生活の営まれる都市環境は、人の手により物質的变化が絶え間なく行われている。この変化は多くの場合、都市開発や住人の所得階層など、様々な資本主義的背景を持つ尺度に基づき測られている。しかし、それは社会の変化を伴うものであり、現代社会の尺度ごとに速度を持って変化をする点に拠り所のなさがある。

都市を評価する方法として、時間のもたらす蓄積や地形を結び付けた多方向に深く評価するものがある一方で、一般的に可視化されやすい反面、変化しやすい都市環境の表層を観察する方法は捉えどころのないものとされている。しかし、変化しやすい表層において、通常であれば個別に知覚されず曖昧に認識されるものや、そもそも知覚されないものを認識し、都市環境の一部として表層を観察することで速度を伴う都市観察が可能となるのではないだろうか。

本研究の目的は、深く評価する蓄積をもとにした客観的評価のみでは捉えられない、速度を持つ評価、観察を行う方法論を探るために、既存の方法論を体系化することにある。

2. 研究方法

考現学から始まり、現在までに日本でなされてきた都市観察のフィールドワーク、エスノグラフィの調査法を体系化し、表層の調査において用いることのできるものや、観察対象の選定を行う。都市観察の方法やフィールドワークの方法、観察における対象を文献調査により明らかにする。

3. 都市の観察方法

3-1. 考現学⁽¹⁾ 路上観察学⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾

今和次郎、吉田謙吉らが、関東大震災後の東京に発

生した震災バラックを調査すると同時に、看板や街の人々の衣類までスケッチして記録に残したことが、考現学の始まりである。

「世の中の変貌を目の当たりにし、復興を希求する周囲の反応や社会の要請とは異なった、現状を注視するという風変りな行動」⁽²⁾であり、日本における都市観察行為の先駆けである。現代風俗あるいは、現代世相を研究する目的を持ち、観察対象としては、人の行動に関するもの、住居関係のもの、衣服関係のものなどに分類される。近い調査方法を持つ学問として、考現学と時間的対立を持ち過去の人類の物質的遺物を扱う考古学、空間的対立を持ち未開部族を対象とする民俗学・民族誌があり、現在は範囲が広がり、民俗学において未開部族というものは、観察者との関係性をもとに定義されるが、どちらも人類を観察することを目的とする。収集したものを体系的にまとめ、発展をもたらすのではなく、多くの対象を収集し、対象の細部をより多く記す点が特徴であり、後の系譜を継ぐ路上観察学に通ずる参加の容易さを持つ。

その後の考現学の系譜にあたるものとして、超芸術トマソンと建築探偵団があり、赤瀬川原平による超芸術トマソンは、美術館の芸術段階である読売アンデパンダン展への出展、路上の芸術段階であるハイレッド・センター、そしてトマソンを探す路上の観察段階へと、造形的自己表現→肉体的自己表現→自己表現消滅という芸術の在り処を主題とし、そこからの脱却という変遷をたどる。一方、藤森は建築探偵団をトマソンと同時期に始めており、看板建築の発見を期に起こる。

ふたつを前身とする路上観察学は、街にある様々な遺物や情報を収集する。赤瀬川を中心とし、藤森や南伸坊、林丈二等、多分野の路上へ関心を持つ人々が様々なものを収集するものである。路上における観察対象は、マンホール、建物のカケラからチラシ、

1:日大理工・院(前)・建築、2:日大理工・教員・建築

女子高生の制服など、多岐にわたるが、特筆すべき点は、路上における観察対象が示すように、各々の都市に対する知覚の多様性があることであり、情報に溢れ飽和状態の都市を他人と一様に知覚することは極めて困難であるとわかる。南後由和は「路上観察学会は、予定調和的な全体性を希求したのではなく直線的な時間軸から取り残された物件にまなざしを向けていた。……観察者のまなざしとは、個別な主観性に還元されうるものでも、自律したものでもないがゆえに同時代的な速度体制の制約を含め捉え返されなければならない」⁽³⁾と述べ、路上観察学会内における、トマソンに見られる見立てなど共通した物件に対する視点が存在するが、それは、地理的、文化的、時代的背景により変化するものであるため継続的繰り返しの観察が求められることがわかる。

3-2. 東京の空間人類学⁽⁵⁾

陣内秀信は、都市を読むには、江戸と東京の近世をつないで見通す通景を必要としており、時間を貫通させて立体的に見ることを二つの時間地点で扱っている。また、江戸の地図を持ち、自分の足で歩き、地形と歴史的に成立した土地利用の在り方を身体で感じながら、都市を読む。江戸時代の地形を重ね、現在との違いを認識することにより空間を把握する。そして、土地の経済、文化の分布、関係性から、空間構造や発展を読み、武家の町である山の手と町人の町である水の空間という境界分けを行う。また、陣内は「現在の都市空間を徘徊しながら、大正・明治・江戸と遡りつつ、そこに積層した都市の歴史を讀んでいくには、地上より水上のルートを探るほうが、はるかに有効」と述べており、かつて水辺空間に広がっていた秩序を空間ごと捉え、現代の都市が抱える問題を比較し、その間に挟まる積層と東京の変遷を明らかにしている。

水辺の空間構造に着目し、町の成り立ちを読むことで、知覚の差が出やすい都市観察に、一定の共通した認識を持つことができる方法といえる。

3-3. アースダイバー⁽⁶⁾

中沢新一のアースダイバーは、地形や文化の変遷といった都市の歴史を理解して観察を行い、地球の深層に潜るテーマを持つ。地層、地形による分類を基とし、洪積地と沖積地という境界の変遷を東京の空間人類江戸以前、古くは縄文の地層から情報を得る。開発や進歩という時間の浸食を受けづらい「無の場所」として神社や寺院を扱うことにより、現在まで貫通した時間軸によって都市を評価する。過去の人々の水辺と内陸地の土地活用の違いを、湿った土地と乾いた土地という東京の空間人類学と近い概念で表す。例として渋谷は、大部分はかつて水の底にあり、宮益坂側と道玄坂側の二つの斜面に古代

人は横穴を掘り、墳墓をつくっていた。水が干上がったあとは、自然と花街がつくられる。東京の空間人類学とは異なり、町人と武家というハッキリとした住み分けだけでなく江戸以前と以降の土地の歴史を反映したより境界が可変的かつ概念的な土地の重ね方であることがわかる。

現在の東京の都市空間に大きく痕跡を残す「無の場所」の境界により、都市を知覚し、過去に形づくられ、現在まで続く土地に対する意識を探る方法である。

表1 観察比較表

	観察対象	観察方法
考現学	現代風俗、現代世相	考古学・民俗学で用いられる科学的方法を含めて量的調査
路上観察学	物件(空間である全体性から取り残されたもの)	考現学をならった方法をとるが、「見立て」が存在する
東京の空間人類学	水辺空間、江戸以降の土地利用の歴史	歴史を用い、土地の用途変遷をエリア化
アースダイバー	地層、洪積地と沖積地、寺社仏閣、墓、歴史	地層を用い、地形的条件と変遷を現代と比較

4. 結論

観察対象と観察方法を上記の表にまとめた。考現学、路上観察都市の観察方法には、表層を捉える意識があり、より知覚の差が表れやすいことがわかる。特に情報が飽和状態となっており、活動の大きさに幅のあるモノやコトをどのように拾い、記号化するのか、しないのかなど、個人の知覚をする際の差が左右することがわかった。また都市における表層の変化を観察するには、モノの観察だけでなく、コトを観察する必要があり、コトの起りや痕跡、活動者を発見できる方法論をとる必要があることがわかる。対象の設定からどのような働きに着眼するのか、また、どの程度まで共通の知覚を促すか、歩行や発見、観察方法を中心に体系化した。記録法も用いて設定していくことを今後の課題とする。

【参考文献】

- (1) 今和次郎：考現学入門，筑摩文庫，1987.1
- (2) 松岡剛：観察者たちがもたらすもの路上と観察をめぐる表現史 考現学の「現在」，フィルムアート社，pp10-19, 2013.1
- (3) 南後由和：笑う路上観察学会のまなざし—都市のリズム分析へむけて 路上と観察をめぐる表現史 考現学の「現在」，フィルムアート社，pp130-141, 2013.1
- (4) 赤瀬川原平、藤森照信、南伸坊：路上観察学入門，筑摩書房，1993.12
- (5) 陣内秀信：東京の空間人類学，筑摩書房，1995.4
- (6) 中沢新一：アースダイバー，講談社，2019.3